

感謝箱献金だより

ガリラヤのほとり 27 号

感謝箱献金事務局（コア）〒221-0852 神奈川県横浜市神奈川区三ツ沢下町 14-57 横浜聖アンデレ教会内
TEL/FAX 045-620-8282 E-mail:kansyabako@grace.ocn.ne.jp

困難の中にあっても感謝と希望を



横浜教区主教 ローレンス 三鍋 裕

感謝箱献金のお便りを読むたびに思わされています。国の内外を問わず紛争、災害、貧困、差別に苦しんでいる人々の何と多いことかと。でも人間だけがまだ会ったことのない人々、きっとこれから会うことがないだろう人々の喜びや苦しみを分かち合うことができるのです。感謝箱献金を通してそれらの人々と一緒に生きていることを感じています。

色々と問題はありますが、やはり日本は豊かな国だと思います。しかしこの豊かさから取り残された人、寂しさの中にいる人がいることを忘れたくありません。アジア・アフリカにもまだまだ貧しい地域が多くあります。根強い差別もあります。多くの女性には貧困と差別が同時に押し掛かっています。薬が開発されてきましたが HIV はまだ解決した問題ではありません。生まれたときからの病気であり、しかも同じ病気で両親を先に亡くした子供たちには教育や栄養どころか命も保証されません。気が付かないふりではなく、目を開けば見える現実です。豊かなアメリでさえ貧困と差別があります。もちろん人間が生み出したものです。奪い合えば不足し、分かち合えば足り、与え合えば余るといわれますが。

貧しさは困ったものです。でも全く希望がないわけではありません。若いころに訪ねたネパールでは黒板さえない学校で子供たちは学ぶ喜びに溢れていました。パプア・ニューギニアの神学生たちは家族で畑を耕しながら宣教に遣わされる日を待ち望みつつ学んでいました。ウガンダでは HIV 感染の子供の横で母親が祈っていました。困難の中にも希望がありました。災害は避けられないにしても、その後の困難は分かち合って担うことができるはずです。そして困難の中にあるけれども献げられる感謝もあるはずです。祈り合いたいのです。

わたしたちは困難の中にある人々に向かい合い、心と手を差し延べようとするときに義務感を感じることがあります。確かにキリスト者の義務ではあります。でもそれが祈りから出発する素晴らしいさを喜びたいのです。単なる献金ではなく「感謝箱献金」であることが素晴らしいのです。

困難がなくなるわけではありません。しかし困難が練達と希望を生み出すことを確認したいのです。そしてご一緒に感謝をささげましょう。皆さまのお働きの上に御祝福が豊かにありますようにお祈り申し上げます。

「可児ミッション」についてのご報告とお詫び

中部教区主教 ペテロ 渋澤一郎

日本聖公会婦人会のお働きの上に主の祝福とお導きをお祈りいたします。日本聖公会婦人会からはいつも多くの支援をいただいておりますこと心より感謝申し上げます。

さて、中部教区の可児ミッション(2016 年 4 月より「特定非営利活動法人可児ミッション」)について大変残念なご報告とともに、お詫びを申し上げなければなりません。

可児ミッションは、感謝箱献金より、フィリピン人の子どもたちの保育・教育事業のために、2013 年度以降 2016 年度まで、送迎用バス購入や月謝補助など、毎年皆様方の温かいご支援を頂いてまいりました。また、その間に、日本聖公会婦人会役員、感謝箱献金事務局の方々が可児ミッションを訪ねてくださり、「ガリラヤのほとり」等を通して可児ミッションの働きを紹介してくださいました。

しかしながら、可児ミッションの事業に対しての中部教区及び NPO 法人としての管理体制が結果的に不十分であったがゆえに、保育・教育事業の継続が困難となりました。その結果、可児聖三一教会を会場に行っていた「可児キンダークラス」を 2016 年 9 月末、岐阜聖パウロ教会を会場に行っていた「きぼう教室」を 2017 年 3 月末に閉鎖せざるをえなくなりました。ご支援をいただいていた日本聖公会婦人会の皆様には大変申し訳なく、お詫び申し上げる次第でございます。

本年 4 月以降、NPO 法人による保育・教育事業は休止となりましたが、可児聖三一教会はもちろん存続しており、同教会も含めた広い意味での中部教区としての可児ミッションの働きは今後も継続されることになります。NPO 法人としての事業も含めた今後の可児ミッション全体の活動のあり方につきましては、事業休止に至る経緯の検証と反省に立ってその方向を探って参りたいと考えているところです。

なお、2014 年度～2015 年度に感謝箱献金の援助を得て購入した送迎バスや備品類、2016 年度にご支援いただきました味噌汁・副菜のための費用は、2017 年 3 月 24 日の「きぼう教室」の卒業式に至るまで大切に活用させていただきましたことを併せてご報告申し上げます。

これからも日本聖公会婦人会のお働きの上に神様の祝福をお祈りいたします。

昨年 10 月に、感謝箱献金より 4 年にわたり支援を続けてきた「可児ミッション」の事業中止の連絡を頂きました。

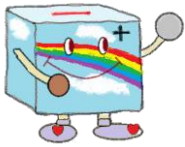
地域に暮らす移住労働者家族（おもにフィリピン人）居宅にこもりがちで日本語を話すことのできない子どもたちを支援し、言葉だけでなく、文化や社会性を育むことができる場として、たくさんの子どもたちの笑顔と将来の可能性を守るための活動が報告されてきました。これまでのお働きに心より感謝いたします。

その後、可児ミッションで学んでいた子どもたちは全員、他の民間保育施設や可児市委託事業の岐阜教室（きぼう教室）に通っていた生徒についても、4 月に年少・年中児が公立保育園に編入、年長児は中学 2 年生は学区の公立小学校に入学したそうです。

子どもたちの歩みを、神さまがお守りくださいますように。

感謝箱献金事務局





東北教区婦人会を お訪ねしました

2月17日～18日(土)山形県天童温泉にて、第54回東北教区婦人会総会が開催され、感謝箱献金事務局からも4名参加し、感謝箱献金の歴史と現在お献げしているところの活動状況を写真等パワーポイントを使用して報告し、2日間の総会に私たちも参加させて頂きました。

最初の夜は、小グループにわかれて話し合い、意見交換でしたが、婦人会を退会、休会される教会が出てきたりしている現在の婦人会の様子を熱心に話し合われました。

ひとつとではありません。どこの教会婦人会でも若い人の減少、高齢化、婦人会って必要なの? 等々の諸問題を同じように抱えているのではないのでしょうか。

翌朝の開会礼拝はチャプレンの山形聖ペテロ教会 涌井康福司祭さまが、ピンチはチャンスですと力強く奨励をされ、出席者は50名弱でも、聖霊に満たされた素晴らしい礼拝でした。

その後は総会で諸議案の審議があり、感謝箱献金事務局は、お献げ先のサイディアフラハ(在ケニア NGO) やリグリマ・バングラデシュ(少数民族の女性を支援)の方々が作られた作品の紹介と販売をさせて頂き、活動の一部をパンフレットで広報いたしました。

感謝箱献金のお献げ先に、東日本大震災支援(積立)があり、今年の3月11日で大震災から6年が過ぎようとしています。婦人会の皆さんに伺って見ますと、仙台基督教会婦人会の皆さんは有志の方々とご一緒に2月24日に被災地支援に福島県新地町に出かけて茶話会をなさるということです。また大館聖パウロ教会の婦人会の方は、日本聖公会「一緒に歩こう! プロジェクト」の釜石ベースが終了し、新しく釜石支援センター望(のぞみ)という支援団体ができて、そこへ有志のみなさんとチームキリタンポと称して伺い「キリタンポを作って食べる会」を3月末に仮設住宅で実施されるそうです。

タベは、あんなに頭を抱えて話し込んでおられたのに、ぱっと切り替えて太平洋の津波被災地まで遠く出かけて行かれる実行力を持ち合わせておられるとはさすが婦人会です!

東北教区婦人会の指導聖句は

そのとき、わたしは主の御声を聞いた。

「誰を遣わすべきか。誰が我々に代わって行くだろうか。」

わたしは言った。

「わたしがおります。わたしを遣わして下さい」

『イザヤ書』6章8節です。

このみ言葉と東北教区婦人会の皆さんから、大いに元気を頂いて帰ってまいりました。



スライドによる感謝箱献金の説明をいたしました。

事務局スタッフ 近藤順子



恵みの風を受けて

お献げ先からのご報告のコーナーです。

今回は、3月にダッカで開催されたグリマ運営委員会にご出席の上澤姉より、活動の実施状況と、「リグリマ・バングラデシュ」につながるガロの女性たちの近況をお伝えしました。

リグリマ・メンバーの危機対応力

リグリマ・ジャパン代表 上澤伸子

バングラデシュ政府は近年、外国資金の流入を規制して、過激派グループの活動を封じこめようとしています。その規制によって、NGO の合法的な活動までもが活動と資金調達の面で制限を受けるようになりました。その結果、たくさんの NGO が地方事務所を閉じ、そこに勤めていた人たちが職を失っています。リグリマのメンバーのなかにも、本人あるいは家族が NGO を解雇され、現金収入の道を閉ざされた者がいます。その一例をお話します。

マリアさんはミッション系 NGO の事務所でボランティアとして働き、わずかな報酬を得ていました。しかし、事務所の閉鎖と同時に、収入源を失い、農業に使う費用や子どもたち2人の教育費を払うことができなくなりました。マリアさんは職を失ったからといって嘆いてばかりはいられません。彼女はリグリマのトレーニングで習った裁縫技術を活かして、近所の人から注文を受け、報酬を得るようになりました。

リグリマのメンバーはこれまでトレーニングで裁縫を習って、家族の衣服を縫い、被服費の家計支出を抑えてきました。わたしたちはこれも家計を助ける有効な手段だと考えていました。しかし、リグリマ・メンバーは危機に陥ったときに、わたしたちの予想を超える「やる気」を出し、裁縫技術を収入へと結びつけたのです。その危機対応を実現させたのは、少数民族として何度もリスクを乗り越えてきたガロ女性たちの底力であり、それを信じてくださった婦人会のみなさまのお支えです。あらためてお礼を申し上げます。

今年度は6月にガランパラ、アンチェングリ、ボイタカリ・グループに向けて、東部地域で初めて裁縫トレーニングを実施します。指導するのは、刺繍の得意なガランパラ・グループのノンディタさんです。ほかにも東部グループを中心に池の再生や魚の養殖プロジェクトを実施する予定です。今年は例年よりも早く、ガロの人びとの住むバングラデシュ北部で鉄砲水災害が始まっています。被害が拡大しないよう、またリグリマの活動が順調に進むようお祈りくださいますようお願いいたします。



ガロの女性たちが作ったブックカバーや巾着



裁縫トレーニングの様子

感謝箱とわたし

聖職候補生 マルコ 福田弘二

今年の大斎節第3主日の福音書は、ヨハネによる福音書4章の「イエスとサマリアの女」の物語が取り上げられました。のどの渇きを覚えられたイエス様は、サマリアの女に「水を飲ませてください」と頼みます。それは、主がサマリアの女を必要としているということを示しています。そして、イエス様は「わたしが与える水を飲む者は決して渇かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る」とおっしゃいました。それは神が「イエス様こそ私たち一人一人の心の奥底にある魂の飢え、乾きを満たすことができる方であることを、私たちに教えようとしているのだと思います。イエス様に会ったこのサマリアの女は、人々にキリストの福音を宣教する者となりました。

さて、昨年10月に感謝箱献金事務局(コア)の皆様が聖公会神学院にいられた時、「感謝箱献金は寄付ではありません。私たち一人一人が日々恵みを受けていることの感謝と祈りの小さな献げ物です」と説明がありました。日本聖公会婦人会の感謝箱献金は、私たちが神から愛されていることへの返答であるとも考えられます。

サマリアの女のように私たちも人生のある時にイエス様に声を掛けていただき、永遠の命の泉をいただきました。この感謝箱に献金することは「水を飲ませてください」と頼んでおられる、いと小さき者であるイエス様にお献げすることです。イエス様は私たちを必要とされています。主からいただいた、永遠の命の泉への感謝を日々お献げしたいと思います。



プロフィール

出身：群馬県 1955年生まれ。

経歴：38年間、公立の小・中・特別支援学校、教育委員会等に勤務し、定年退職後に聖公会神学院に2年間の特別聴講生として入学、2017年3月に修了。4月から、北関東教区榛名聖公会教会勤務。

特技：ミュージック・ケア(音楽療法)

特技：古文書(くずし字)が少し読める

趣味：最近は陶磁器に興味がある



支援先のことを学んだり、考えたり、一緒に小さな支援活動を展開しましょう

★ 支援商品の委託販売

- 支援商品の販売で活動資金を増やす努力をしている団体の、紅茶や手工芸品(ブックカバー・巾着・バッグ布製小物) アクセサリー等を、婦人会の会合や所属教会のバザーなどで委託販売し、収益向上と活動へのご理解を頂くためにご協力ください。

★ 積極的にお話を伺う

- 献金先の代表(コーディネーター)の方に、各地の婦人会に出向いていただき、現地での活動のお話や、支援の先につながっている方々のご様子など、詳しく教えていただくことも可能です。積極的にお招きし、お話を伺う機会に与ってください。

ご協力、訪問のご希望、その他お問い合わせは 感謝箱献金事務局まで

☎ 045-620-8282

現在は献金支援の対象になっていませんが、感謝箱献金の働きにより支援に係らせていただいた方々の、その後の活動と近況をお伝えするコーナーです。支援のかたちは変わっても、つながりを大切に、祈りをもってお支えできることを願って掲載いたします。

「アルディ・ナ・ウペポ」の報告会に参加して

2月25日(土)東京聖三一教会において「アルディ・ナ・ウペポ」の報告会が開催され、日聖婦役員の木村静代姉とコアから古谷、土屋が出席した。

ウガンダ北部にあるグルの職業訓練所には、電気を導入するため、工費の3分の1をウペポが負担することで進めてきたが3年かかり、やっと敷地の中まで導入された。建物の中に導入したいが、工費がかかる上に、電線の盗難もあり、すぐには実行できない状態だが、なるべく早く電気を使う、板金、溶接などの訓練を男子も含めて、実施する方向に努力している。また、出来れば電動ミシンも導入し裁縫訓練の効率を上げていきたいとの報告があった。

この活動とは別に今、南スーダンの内戦により、ウガンダ、西ナイル地方に多くの難民が押し寄せており、その救済活動にウガンダ聖公会の信徒であり、APCODEF(アルーア小作人コミュニティ・開発ファンデーション)のプログラムディレクターであるカンディカ・サムソン氏が率先して関わっているとの連絡を受け、オートバイ、スマホなどを提供し、緊急の支援として100万円の支援金を予定している(その後送金済)との報告があった。アルディ・ナ・ウペポとサムソン氏は日本での「アジア学院」研修生のころより、面識があり、ウガンダに帰国の後、指導に当たっている彼への支援を続けているとのこと。難民プロジェクトとしては、多くの難民の中でも500人の女性、子どもを対象としてAPCODEFのスタッフが担当し、実施すると言う報告がサムソン氏より寄せられていることも伝えられた。

日聖婦・感謝箱献金としても、この難民支援に対して何らかの支援をするべきと感じ、今後、実施の報告や成果を見極めながら確かに現地に届く支援の方法を早急に考えていくことが大切と思った。

(報告 古谷美子)



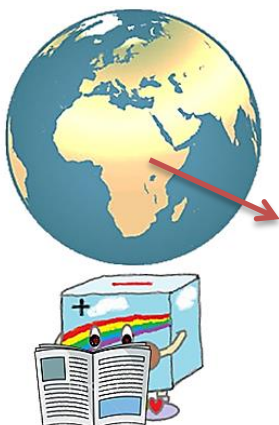
アフリカ各地で取材のカメラマン桜木さんからの報告

南スーダン難民への迅速な支援の拡大を求める声明をウガンダ政府が発表

(2017年3月24日 UNHCR 国連難民高等弁務官事務所 記事参考)

かんしゃ君 メモ

南スーダンの首都ジュバで昨年7月に再燃した戦闘により、難民、国内避難民として更に多くの人々が家を追われることとなった。100万人以上が南スーダン周辺国に避難しており、不安定な状況が今も続いている。隣国のウガンダでは現在80万人以上の難民を受け入れている。紛争と食糧危機により、昨年夏以降、安全と保護を求め南スーダンからウガンダへと逃れてくる難民が急増し、今年3月には毎日約2800人もの難民が押し寄せた。水や食料が不足し、国内の受け入れ施設では対応しきれっていない。ウガンダはこれまで、難民と現地住民の双方に恩恵のある開発計画(難民に土地を提供しコミュニティに根付き地域の発展をともに目指す等)で人道支援を支え、包括的な難民保護に進んで取り組む模範国家として位置づけられてきたが、公共事業や地域のインフラにかかる莫大な費用の長期的な負担で、深刻な資金不足を抱えているうえに、かつてない大規模な難民の流入により、難民支援の継続が危機的な状況へ追い込まれている。世界で最も急速に深刻化している難民危機を乗り越えるため、国際社会の助けを求めている。





教区婦人会からの声

今回は大阪教区からのお便りです。教区の範囲が狭いので、お互いの教会間の距離も近く、コミュニケーションがとりやすく、まとまった教区という印象です。2016年度より、教区で集まった感謝箱献金は100パーセント、日聖婦の感謝箱に送ってくださるとのこと。コアとしては、その期待に添えるよう、今後の活動をより大切なものとして進めて行きたいものです。

感謝箱献金の働きに感謝して

大阪教区婦人会会長 ハンナ 井上恵美子

大阪教区は大阪府と兵庫県の一部（芦屋市・尼崎市・西宮市）に22の教会があります。教会に婦人会・女性の会がなくても会員となって活動に参加していただいています。交通の便が良いので教区内はどの教会を訪問しても、南から北、東から西、日帰りが充分可能です。ですから教区婦人会で年3回の礼拝と集会を守っています。

さて、昨年5月の第92回総会において大阪教区の感謝箱献金は全額日聖婦へ送金することを決議しました。以前は65%を日聖婦へ送り、35%は大阪でお献げ先を考えていました。コア（感謝箱献金事務局）の働きが10年となり、お献げ先について詳しい報告が『ガリラヤのほitori』に掲載され、お献げ先と顔と顔の見える関係が根付いてきたことを理由にすべてお任せすることになりました。

私たちの教区では以前から社会福祉献金という項目で各教会婦人会の皆さんからご協力をいただいています。この献金により、教区独自のお献げ先へは継続が出来、また災害支援にもすぐに対応出来るよう心がけています。会員数の減少もあり、年々減額していますが、内容を精査しながら続けています。

先日の被献日にコア（感謝箱献金事務局）の皆さんにミニ講座と題して来ていただきました。なるべく多くの会員に聞いていただきたいとの思いで、教区婦人会で行う被献日礼拝の午後に計画を致しました。午前の礼拝に140名出席されましたので、午後からは約100名の方々に聞いていただけたと思います。125年もの歴史や古い感謝箱の写真やお話で、日本国内の人々が生活に困窮していた時代でさえ大きな献金を送られていたと知り、参加者の皆さんは、素晴らしい先輩諸姉の皆さんへ思いを馳せておられました。また、私たちの日々の感謝の献金が、世界の遠い国々の苦しい立場の人たちに確かに届けられている、このことにも感謝されていました。支援グッズのミニバザーでは皆さんは協力というよりも珍しい品々や細かな刺繍を見てお買い物を楽しんでいたように思われます。

長く感謝箱献金を続けておられる会員で、今の虹の箱を知らない、感謝箱献金の祈りを知らない、という人に出会うことがあります。「何べんも説明してるのになんで知らんの？」（大阪弁です）という思いを抑えて、辛抱強く繰り返し皆さんにお伝えしていきたいと思いますし、その事の大切さを学んでいます。



絵：三原晶子

「見えないもの」

「心で見なくちゃ ものごとはよく見えないってことさ かんじんなことは 目に見えないんだよ」というのは、サン・テグジュペリの「星の王子さま」の中の有名な言葉ですが、聖書の中では、聖パウロが「わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです」と言って、見えるものより、見えないものにこそ価値があることを説きます。

このように、信仰の世界、宗教の世界では、見えないものが大切にされます。しかし、そのことは同時に、観念的妄想を産む可能性を秘めた宗教の危うさとして、「オウム真理教」に代表されるような社会的な問題を引き起こすこともあるのです。少し昔、家なき子の「同情するなら金をくれ」と叫んだ言葉が話題になりました。目に見えない憐れみの心、同情する心なんかいらない、目に見えるものとして、金をくれ、というのは、正直な言葉のように思えます。わたしたちは、いつも現に目に見えるものを基準としたこの世の生活の中で、しかし一方で、そもそも自分が一体どこから来たのか、そしてやがて一体どこへ行くのだろうかというような、存在そのものに対する疑問を抱きつつ、永遠なるものを求めて生きているのです。その意味で実に矛盾した存在であると言えます。

そこで、じっくりお茶をもう一杯飲みながら、この「見えるもの」と「見えないもの」を対立したものではなく、融合する道はないものかと考えるのです。ふとそれは単純なことだと気づきました。例えば、泊めていただいて、温かいおもてなしを受けて、すっかりお世話になった、その目に見えない感謝の気持ちをどうしたら相手に伝えることができるのでしょうか。必ずそれは、目に見えるものを通して表すのです。手紙という言葉で、あるいは、感謝のしるしとして、物を贈るのです、おいしいお菓子か、相手の方が好きなお酒か、喜ばれる物を贈るのです。教会では、それを聖奠（サクラメント）と言います、目に見えない霊の恵みの目に見えるしるし、または保障であり、その恵みを受ける方法として定められているもので、その代表が「洗礼」と「聖餐」なのです。

チャプレン 司祭 ヤコブ 三原一男

2017 年 難キ連 チャリティーコンサート

日時：7月15日(土)午後2:00～

場所：御茶ノ水クリスチャンセンター 8階チャペル

出演：チェロ ベアンテ・ボーマン氏 ピアノ ルリ子・ボーマン氏



☆ 申し込み・お問い合わせ先

難民・移住労働者問題キリスト教連絡会(難キ連)

事務局 携帯 090-6012-8252

— 難キ連では、支援活動サポーターを募っています —

難民支援に関心のある方、ボランティア、行事ボランティア(セミナー、コンサートの受付等、開催当日のみのお手伝い)、また翻訳ボランティアにご登録・協力くださる方を募集中です。